

2023
特選
金融担当
大臣賞

第56回「おかねの作文」コンクール

未来への希望を託して

神奈川県・慶應義塾普通部 2年 三橋 永暉

僕の母方の祖父は僕が3歳の時に難病指定の病気で亡くなった。とても元気だったのに突然病気が発覚したようだ。治療法が今も見つからない病気で、治療にも参加し^{いちろ}一縷の望みを託しながら闘病したが半年後に亡くなってしまったようだ。

お墓参りをした時に、当時の祖父の保険金や、闘病中に祖父の友人達からいただいたお見舞金等は全て治療法の研究開発をしていた大学の研究室に寄付し、その後も毎年、寄付を続けていると祖母から聞き非常に驚いた。理由を聞くと、祖父の病気が発覚し治療法が見つからないと知って家族皆が悲嘆にくれたが、1日も早く治療法を見つけ、今後悲しい思いをする人が一人でも減ってほしいと思い、当時、祖父と相談して全額寄付することにし、今も寄付を続けているとのことだった。僕はそれまでお金というのは自分が何か欲しいものや必要なものを得るために、今は毎月のお小遣いやお手伝いのお駄賃等を、大人になったら働いて貯めるものという考えしかなかった。寄付は両親が行うふると納税を、返礼品を通じて何となく知っているくらいであった。後日、祖母の話に驚いたと母に伝えると、「確かにおじいちゃんは亡くなってしまったけれど、1日も早く治療法が見つかってほしいと今も強く願っていてね、寄付することで微力ながら研究を支援するだけでなく、自分達の希望も託しているのよ。」と言い、祖母だけでなく母も治療法研究をする大学の研究室に毎年寄付を続けていると教えてくれた。寄付が誰かの役に立つためだけではなく、自分の希望を託すためでもあるという考えは寄付をしたことがない僕には衝撃だったので母に伝えると、「あなたならどこに寄付したい？」と質問された。

もし自分の貯金の一部を寄付するとしたらと考え調べてみると、自治体、学校、交響楽団、美術館、児童養護施設等、様々な所が寄付募集している中で、ユニセフのマンスリーサポートプログラムを見つけた。ユニセフのホームページに

よると、アフリカや南アジア等の途上国を中心に、世界では、いまだ2億人近い5歳未満児が、急性または慢性の栄養不良に苦しんでいて、ユニセフは乳幼児の検査、栄養治療食や予防接種等の支援を通じて乳幼児の命を救う活動をしているとのことだった^{注)}。栄養失調や健康不安等の心配なく、けがや病気の際はすぐに病院に行ける日本の環境が当たり前だと思って育ってきた僕には衝撃が大きく、毎月一定額を寄付することで途上国の子供達が健康に育つことに少しでも役に立つならと思い、マンスリーサポートプログラムに申し込みたいと母に頼んだ。母からは寄付するお金は手伝いのお駄賃等自分で貯めたものを使うよう言われ、弟にも声をかけ、2人で毎月2,000円のサポートに申し込むことにした。我が家のお手伝いは1回50円のものが多く、部活や日々の課題で時間がない中で貯めるのはなかなか大変で、今日は手伝いをしたくないと思う日もあったが、マンスリーサポートプログラムのことを思い出すと、皆が健康に育つ世の中になってほしいから今日も頑張ろうという気持ちになれた。僕も弟も手伝いを欠かさず行い、今のところ毎月2,000円の寄付を続けている。

祖母や母の寄付も、僕達兄弟の寄付も誰かの役に立つためだけにするのではなく、未来がこうなってほしいという希望も託しているのだと実感している。これからも少額でも寄付を続けていきたい。

(注)

日本ユニセフ協会「ユニセフ・マンスリーサポート・プログラム」

URL https://www.unicef.or.jp/cooperate/coop_monthly2.html

閲覧日 2023年4月2日

